



## 成子町の下水道事情②

前回は『町方書上』の「成子町」の下水に関する記述を取り上げた。これによると、当時成子町が管理する二つの下水があり、そのうちの一つは、青梅街道を挟んだ常圓寺の向かい側から街道を横断して、常圓寺の背後の柏木村に流れ込む下水であった。このような下水は「横切下水」と呼ばれる。今回は成子町にあったというもう一つの下水についてみてみよう。

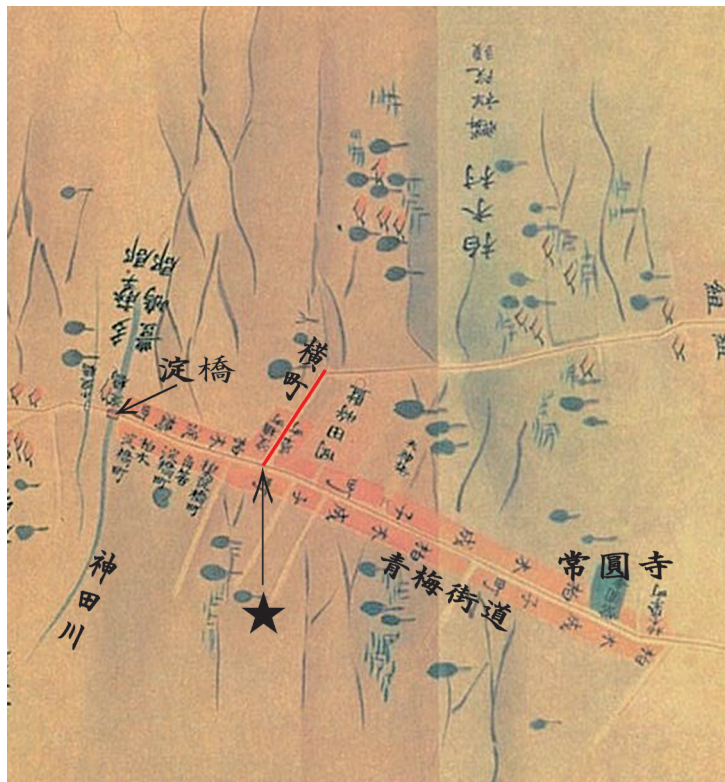
- 一 當町并淀橋町堺横町、両町掛り下水、長両側二而三百五拾間程、幅式尺
- 當町右淀橋町江流申候
- 右下水石橋吉ヶ所、下水之幅式尺、橋之幅吉間四尺

〈書き下し〉

- 一 當町ならびに淀橋堺横町、両町掛り下水
- 長さ両側にて三五〇間程、幅式尺
- 當町より淀橋町へ流し申し候
- 右下水石橋吉ヶ所、下水の幅式尺、橋の幅吉間四尺

〈意訳〉

- 一 當町（成子町）と淀橋町の堺（境）



【図】朱線の部分が「横町」と思われる。その右側が成子町、左側が淀橋町となっている。梅街道は常圓寺から中野方面へ向かって神田川と交差するまで道は下っており、成子町から淀橋町へ流れる下水は、最終的には神田川に流れ込んでいたのではないだろうか。また、この「幅式尺（約六十センチメートル）」の下水には、「吉間四尺」の石橋が一ヶ所かかっていたという。二

にある横町の、ふたつの町で管理する下水である。

長さは両側で三五〇間ほど、幅は二尺である。當町（成子町）から淀橋町へ流している。右の下水には石橋が一か所、下水の幅は二尺で、橋の幅は一問四尺である。

まず、この下水は「當町」＝成子町と「淀橋堺横町」が「掛かり」＝管理する下水であるという。淀橋町は成子町の隣町で、その堺（境）にある「横町」と成

子町がこの下水を使用し、その管理をしているということであろう。「横町」とは、前回も触れたように表通りから横へ入った町筋のことであり、文化十三年（一八一六）年に伊能忠敬が測量し作成した絵図（【図】）をみると、成子町と淀橋町の境界に道が通り、その両側に「成子町」「淀橋町」とそれぞれ町名が記されている。この一方の「成子町」と記された町を指すものと考えられる。

そして、この下水は長さが両側にて三百五十間（およそ六百三十メートル）ほどの長さであるという。【図】からわかるように、成子町は青梅街道の両側に向かいあつて町屋が並んでおり、この町屋に沿つて敷かれた下水は淀橋町に流れていたという

ことであろう。青梅街道は常圓寺から中野方面へ向かって神田川と交差するまで道は下っており、成子町から淀橋町へ流れる下水は、最終的には神田川に流れ込んでいたのではないだろうか。また、この「幅式尺（約六十センチメートル）」の下水には、「吉間四尺」の石橋が一ヶ所かかっていたという。二

尺という幅は前回の「横切下水」と同じ幅で、その規格が同じであったことがわかるが、そこにかかっていた石橋は、おそらく成子町と淀橋町の「横町」と下水が交差するところ（【図】の★）に架かっていたのではないだろうか。とすると、このことから、成子町と淀橋町の境の横町の道幅が「吉間四尺」＝約三拾ほどであったということも推測される。

ところで、『町方書上』の隣の「淀橋町」をみると、下水に関する記述がない。江戸の町々の下水は城下の建設当初から整備され、十七世紀頃にはおよそ確立していたといわれる。その管理は、当初は専門の奉行が置かれ、度々下水の浚（さら）いをきちんと行うよう命じるなど、日常の維持管理についてのお触れも出されていたが、次第にそれは町々の自治に委ねられるようになり、費用なども町が負担するようになっていったという。成子町から流れてくる下水は、当然隣の淀橋町も利用していたと考えられるが、その維持管理は成子町が請け負っていたということであろうか。

武家屋敷、寺院、そして町屋が入り組む江戸城下を流れる下水は、現代でいえば「インフラ」という、社会が共有する生活の基盤となる施設であろう。したがって、こうした公共施設の維持管理は、城下に住む人々が社会として維持管理しなければならない性格のものである。江戸の町は身分や階層を越え、人々の協力によって成り立っていたのである。